HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国語臨海方言の記述的研究 : ヴォイス・アスペクト体系を中心に [全文の要約]
Author(s)	根岸, 美聡
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第13389号
Issue Date	2018-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/72642
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Misato_Negishi_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

中国語臨海方言の記述的研究

——ヴォイス・アスペクト体系を中心に

根岸美聡

中国語臨海方言の記述的研究

――ヴォイス・アスペクト体系を中心に

目次

第一章　序論

１．１　研究の背景　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

１．１．１　中国語方言の概略と臨海方言の位置づけ　・・・・・・・・・・・・・・・1

１．１．２　中国語方言研究史の概略　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

１．１．３　中国語方言類型論　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

１．１．４　臨海方言の先行研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

１．１．４．１　音韻　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

１．１．４．２　語彙　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

１．１．４．３　文法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

１．１．４．４　総合的な研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

１．２　研究の目的と方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

１．２．１　研究の目的および期待される意義　・・・・・・・・・・・・・・・・・8

１．２．２　研究の方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

１．２．２．１　記述・分析の方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

１．２．２．２　調査の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

１．３　本論文の構成　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

第二章　臨海方言音韻概説

２．１　音節構造　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

２．１．１　声母　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

２．１．２　韻母　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

２．１．３　声調　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

２．２　変調　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

２．２．１　小称変音　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

２．２．２　連読変調　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

第三章　臨海方言文法概説

３．１　統語構造　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

３．１．１　主述構造　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

３．１．２　動目構造　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

３．１．３　述補構造　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
３．１．３．１　結果補語　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
３．１．３．２　方向補語　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
３．１．３．３　可能補語　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
３．１．３．４　状態補語　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
３．１．４　偏正構造　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
３．１．５　並列構造　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
３．１．６　連動構造　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
３．２　品詞分類　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
３．２．１　品詞体系・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
３．２．２　名詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
３．２．２．１　場所詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
３．２．２．２　方位詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
３．２．３　数詞・量詞（数量詞）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
３．２．４　代詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
３．２．４．１　人称代詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
３．２．４．２　指示代詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
３．２．４．３　疑問代詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
３．２．４．３．１　一般的な用法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
３．２．４．３．２　疑問代詞の非疑問用法　・・・・・・・・・・・・・・・・・32
３．２．５　動詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
３．２．５．１　動詞の重ね型　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
３．２．５．２　動詞の接尾辞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
３．２．５．３　動詞句の接尾辞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
３．２．５．４　助動詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
３．２．６　形容詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
３．２．７　副詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
３．２．７．１　一般的な副詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
３．２．７．１．１　範囲副詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
３．２．７．１．２　程度副詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
３．２．７．１．３　時間副詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
３．２．７．２　否定副詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
３．２．７．３　副詞接尾辞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
３．２．８　介詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
３．２．９　接続詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
３．２．１０　構造助詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45

３．２．１１　文末助詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
３．２．１１．１　“爻□ɦia⁰”、“□ɦia⁰”　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
３．２．１１．２　“哇”　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
３．２．１１．３　“呢”　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
３．３　構文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
３．３．１　疑問を表す構文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
３．３．１．１　諾否疑問文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
３．３．１．２　選択疑問文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
３．３．１．３　正反疑問文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
３．３．１．４　疑問詞疑問文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
３．３．１．５　推測疑問文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
３．３．２　命令文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
３．３．３　存現文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
３．３．４　“是…个”分裂文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
３．３．５　動詞コピー構文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
３．３．６　目的語主題化構文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53

第四章　臨海方言のヴォイス体系
４．１　共時的体系　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
４．１．１　概略　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
４．１．２　受動構文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
４．１．２．１　基本的な特徴　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
４．１．２．２　介詞による差異　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
４．１．３　使役構文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
４．１．３．１　基本的な特徴　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
４．１．３．２　介詞による差異　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
４．１．４　処置構文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
４．１．４．１　基本的な特徴　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
４．１．４．２　注目すべき用法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
４．１．５　介詞“拨”のもたらす多義性とその軽減方法・・・・・・・・・・・・・65
４．２　介詞“拨”の多機能性の分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
４．２．１　共時的状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
４．２．１．１　用語の定義　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
４．２．１．２　介詞“拨”の用法の整理　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
４．２．２　介詞“拨”の通時的な機能拡張プロセスの推定　・・・・・・・・・・・71

第五章　臨海方言のアスペクト体系
５．１　概略　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
５．２　アスペクト形式の機能と分布　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
５．２．１　将然・開始・起動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
５．２．１．１　【将然】“快/块要/要”＋動詞句＋“□ɦiɔ^{0}”「もうすぐ～しそうだ」・・・・・・・・79
５．２．１．２　【開始】“□k^{h}œ^{24}想”＋動詞「～しつつある」　・・・・・・・・80
５．２．１．３　【起動】動詞＋“起来”「～し始める」　・・・・・・・・・・・・ 81
５．２．２　持続・進行・継続　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
５．２．２．１　【持続】動詞＋“□kɜʔ^{0}□tɜʔ^{0}”「～している」　・・・・・・・・82
５．２．２．２　【進行】“在（□kɜʔ^{0}）”＋動詞「～しているところだ」　・・・83
５．２．２．３　【継続】動詞＋“落去”「～し続ける」・・・・・・・・・・・・・84
５．２．３　実現・経験・終結・出来事の発生　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
５．２．３．１　【実現】動詞＋“□lɜʔ^{0}”、動詞＋“爻”「～した」　・・・・・85
５．２．３．２　【経験】動詞＋“过”「～したことがある」　・・・・・・・・・85
５．２．３．３　【終結】動詞＋“完”「～し終わる」　・・・・・・・・・・・・・86
５．２．３．４　【出来事の発生】文＋“爻□ɦiɔ^{0} /□ɦiɔ^{0}”「～した」　・・・・・88
５．３　実現相を表す“□lɜʔ^{0}”と“爻”　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
５．３．１　統語的な特徴　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
５．３．２　意味機能　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
５．３．２．１　行為動詞と共起する場合　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
５．３．２．２　二段階動詞と共起する場合　・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
５．３．２．３　変化動詞と共起する場合　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
５．３．２．４　“□lɜʔ^{0}”と“爻”の意味機能のまとめ　・・・・・・・・・・・92

第六章　終章　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94

参考文献　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96

付録１：臨海方言同音字表
付録２：臨海方言文法調査データ

学位論文内容

本論文は、中国浙江省の中部に位置する臨海市で用いられている中国語方言の一つである臨海方言を研究対象とし、音韻体系・文法体系の概略を記述した上で、文法体系におけるヴォイス表現・アスペクト表現に焦点をあて、ヴォイス・アスペクトに関わる各言語形式の意味機能・生起条件の分析を試みたものである。

本論文の主要な研究成果は、第一には、今まで体系的な文法記述がされたことのなかった臨海方言について、その統語構造および主要な機能語の体系を提示したことである。第二には、音韻体系について、先行研究とは大きく異なる連読声調の体系を提示したこと、さらにそれが南部呉方言、閩方言などにみられる「最終音節優勢型」に属することを指摘したことである。そして第三には、アスペクト・ヴォイスという重要な文法範疇の臨海方言における体系化のされ方を、具体的に明らかにしたことである。

各章の内容は以下の通りである。

第一章

第一章では、まず中国語方言の概略とその中での臨海方言の位置づけを確認し、中国語方言研究史の概略を紹介し、さらに中国語方言研究および臨海方言研究の現状とその問題点、本論文の意義・具体的な研究方法について述べている。そのなかで、臨海方言の先行研究には音韻体系を記述したものは存在するが、文法を体系的に記述した研究は存在しないことを紹介した。

第二章

第二章では、臨海方言の音韻体系の概説を行っている。まず主要な先行研究である黄晓东(2007)の提示した音韻体系の信頼性を、約 3000 字の漢字音についての包括的な調査によって確認した上で、声調の調値について修正すべき点を指摘した。さらに黄晓东(2007)が本格的には検討していなかった臨海方言の連読変調、すなわち音節固有の声調が前後の音節との関係により規則的に変化する現象について、それが生起するパターンと生起条件とを中古音（隋代音）の音韻体系の枠組みを参照しながら検討し、その体系を明らかにし、臨海方言の連読変調が、南部呉方言・閩方言などにみられる、岩田(1994)の言う「最終音節優勢型」（最終音節の声調だけが保たれて先行音節が中和されるか声調交替を起こすタイプ）に属するものであることを指摘した。なお、本論文で示した連読変調の体系は、先行研究たる张燕春(2006)の分析結果とは大きく異なるものである。

第三章

第三章では、臨海方言の文法体系の概説を行っている。統語構造、品詞体系と主要な品詞の内実、各種の文法機能を表す機能語の一覧、主要な構文のリストといった言語事実を体系的に提示した。そのなかで、刘丹青(2003)が、呉方言の特徴として指摘した、被動作者が主語と述語動詞との間に副主題として生起する現象が、臨海方言においても存在することを確認した。

第四章

第四章では、ヴォイス範疇が臨海方言においてどのように体系化されているかを論じ、「使役構文」「処置構文」「受動構文」に相当する各種構文について、それを構成する介詞の種類、構文の生起条件について検討を行っている。臨海方言における有標のヴォイス構文を構成する介詞は、以下のように整理される（【表 4-1】）。

【表 4-1：臨海方言の受動構文・使役構文・処置構文を構成する介詞】

介詞	例文	意味機能
□ʤɛ^{22}	录音机 □ʤɛ^{22} 小王 装倒 ⿰又□ɦiɔ^{0}。 レコーダー ～によって 人名 壊す 〈出来事の発生〉 loʔ^{23}iəŋ^{31}ci^{31}ʤɛ^{21}ɕiɔ^{53}ɦɔ̃^{21}tsɔ̃^{31}tɔ^{53}ɦɔ^{0}ɦiɔ^{0} 「レコーダーは小王によって壊された。」	受動構文の動作者を導く
让[1]	1. 渠 弗管 走 搭 □ka^{44}□i^{0}，都 让 人 尊敬。 彼 ～に関わらず 行く ～へ どこ みな ～によって 他の人 尊敬する ge^{21}føʔ^{5}kuø^{53}tsœ^{53}tɔ^{44}ka^{44}i^{0}toʔ^{5}ɲiã^{113}ɲiəŋ^{21}tsəŋ^{31}ciəŋ^{44} 「彼はどこへ行こうとも、人に尊敬される。」 2. 我 让 渠 去， 但是 渠 无有 去。 私 ～させる 彼 行く しかし 彼〈否定〉行く ŋe^{53}ɲiã^{113}ge^{21}k^{h}e^{44}tɛ^{53}ʐ̩^{21}ge^{21}m̩^{0}ɲiəu^{53}k^{h}e^{44} 「私は彼を行かせたが、彼は行かなかった。」	1.受動構文の動作者を導く 2.使役構文の動作者を導く
叫	我 叫 渠 早 点 屋里 去。 私 ～させる 彼 早い 少し 家 行く ŋe^{53} ciɔ^{44}ge^{21}tsɔ^{53}tiɪ^{53}oʔ^{5}li^{53}k^{h}e^{44} 「私は彼を早めに帰宅させた。」	使役構文の動作者を導く

[1] “让”[ɲiã^{113}]と[ʑiã^{113}]の二つの発音があるが、意味機能に違いは見出し難い。

讴	渠　弗　　讴　我　搭　机场　里　去。 彼〈否定〉～させる　私　～へ　飛行場　～の中 行く ge^{21}fəʔ^{5}ɔ^{31}ŋe^{53}tɔ^{44}ci^{31}ʤiã^{21}li^{53}k^{h}e^{44} 「彼は私を飛行場に行かせない。」	使役構文の動作者を導く
拨	1. 我　拨　渠　早　点　屋里 去。 私 ～させる 彼　早い 少し　家　行く ŋe^{53}pəʔ^{5}ge^{21}tsɔ^{53}tiɪ^{53}oʔ^{5}li^{53}k^{h}e^{44} 「私は彼を早めに帰宅させた。」 2. 拨 小老人　培养　成　有用 □kɛ^{0} 人。 ～を　子供　育てる ～になる　有用　(助詞)　人 pəʔ^{5}ɕiɔ^{53}lɔ^{53}ɲiəŋ^{21}be^{21}iã^{53}ʑiəŋ^{21}iəu^{53}ɦyoŋ^{113}ke^{0}ɲiəŋ^{21} 「子どもたちを有用な人間に育てあげる。」	1.使役構文の動作者を導く 2.処置構文の処置対象を導く

上表の中では、受動構文が“□ʤɛ^{21}”と“让”という異なる介詞によって構成されることになっているが、実際には両者では生起条件に違いが見られること、さらに“拨”から構成される処置構文は、一定の条件下では述語動詞が可能補語を伴っていても文が成立するなど、標準中国語における処置構文（“把”構文）とは生起条件が異なることなどをも指摘した。さらに、使役構文の動作者を導く機能と処置構文の処置対象を導く機能を兼ねた備えた介詞“拨”の存在に着目し、その多機能性の内実を分析した上で、“拨”が通時的に如何なる過程を経て各機能を備えるようになったのかという、意味拡張のプロセスを推定した。

第五章

第五章では、アスペクト範疇が、臨海方言においてどのように体系化されているかを論じ、「将然」「開始」「起動」「持続」「進行」「継続」「実現」「経験」「終結」「出来事の発生」といった各種のアスペクトがどのような助詞、副詞等によって表現されるのかを示している（【表 5-1】）。そして多くのアスペクトは標準中国語と同源の形態素によって担われているものの、「開始」を表す“□k^{h}œ^{24} 想”のように形式と機能面で独自性の強い表現形式もあることを指摘した。さらに、「実現相」を表す形式に “□lɜʔ^{0}”、“爻”という二形式があることに着目し、それらの機能差異を分析した結果、前者は動態的事態のもたらした結果状態や何らかの影響が参照時に残存している〈実現・残存〉を表すものであるのに対して、後者は単に〈実現〉を表すものであり、動態的事態の結果状態や影響には非関与的であると主張した。このことは、臨海方言においては、「結果状態・影響の残存」という意味特徴がアスペクト表現形式の使い分けに関与している可能性があることを意味している。

【表 5-1】

機能	臨海方言	標準中国語
将然「もうすぐ～しそうだ」	“快/快要/要”+動詞句+“□ɦiɔ^{0}”	“快/快要/要”+動詞句+“了$_{2}$”[2]
開始「～しつつある」	“□k^{h}œ^{24} 想”+動詞	【※対応する表現なし】
起動「～し始める」	動詞+“起来”	動詞+“起来”
持続「～している」	動詞+“□kɜʔ^{0}□tɜʔ^{0}”	動詞+“着”
進行「～しているところだ」	“在（□kɜʔ^{0}）”+動詞	“在”+動詞
継続「～し続ける」	動詞+“落去”	動詞+“下去”
実現「～した」	動詞+“□lɜʔ^{0}” 動詞+“爻”	動詞+“了$_{1}$”
経験「～したことがある」	動詞+“过”	動詞+“过”
終結「～し終わる」	動詞+“完”	動詞+“完”
出来事の発生「～した」	文+“爻□ɦiɔ^{0}/□ɦiɔ^{0}”	文+ “了$_{2}$”

付録

「付録１」は「臨海方言同音字表」であり、臨海方言における約 3000 字の漢字の音（「字音」）を一覧表にしたものである。これは、共時的な音韻体系および中古音（隋代音）との通時的な対応関係を論ずる基礎資料となるものであり、第二章で論じた内容は主にこれに基づく。臨海方言の字音については黄晓东(2007)が既に自身の調査結果を公表しており、本論文の調査結果も黄氏のそれと大きく異なるものではないが、黄氏の調査結果の信頼性を確認した上で、補足・修正を行った。

「付録２」は、「臨海方言文法調査データ」であり、『中国语言资源调查手册』(pp.169-176)記載の 50 の例文に対応する臨海方言の例文を例示したものである。これらの例文から得られた言語事実は、本論文の第三章の文法概説において整理されている。

2 標準中国語の“了 le”はその統語的分布と機能によって、“了$_{1}$” と“了$_{2}$”に分けることができる。“了$_{1}$”は動詞に後接するアスペクト助詞（動詞接尾辞とも呼ばれる）であり、“了$_{2}$”は文末に置かれる文末助詞（語気助詞とも呼ばれる）である。例えば、朱德熙(1982)では“了$_{1}$”は動詞接尾辞であり、動詞の直後に置かれ、動作の完了を表し、“了$_{2}$”は文末のみに現れ、新たな状況の出現を表すと説明されている。

【参考文献】

(英語)

Chappell, Hilary and Peyraube, Alain. (2011) Grammaticalization in Sinitic Languages. In Bernd Heine and Heiko Narrog (eds.), *The Oxford Handbook of Grammaticalization*. Oxford:Oxford University Press.

Comrie, Bernard. (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.

Comrie, Bernard. (1981) *Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology*. Oxford: Blackwell.

（※松本克己 ・山本秀樹訳(2001)『言語普遍性と言語類型論―統語論と形態論』、ひつじ書房）

Hopper, Paul J. and Traugott, Elizabeth Closs (1993) *Grammaticalization,* Cambridge University Press.

（※P.J.ホッパー・E.C.トラウゴット著、日野資成訳(2003)『文法化』九州大学出版会）

Schuessler, Axel(2009) *Minimal Old Chinese and Later Han Chinese, A Companion to Grammata Serica Recensa*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

(中国語)

蔡海燕(1997)「临海方言的状态词」『台州师专学报（社会科学版）』第 4 期 pp.38-42

蔡勇飞(2015)「临海方言音系及有关词汇、语法特点的研究」『中国方言学报』第 5 期 pp.130-139

曹志耘、秋谷裕幸、太田斎、赵日新(2000)『吴语处衢方言研究』(日本)好文出版

曹志耘主编(2008)『汉语方言地图集 语法卷』商务印书馆

戴昭铭(2004)「弱化、促化、虚化和语法化――吴方言中一种重要的演变现象」『汉语学报』第 2 期 pp.26-34,95

根岸美聪(2011)「浙江临海话的介词系统」严翼相主编『中国方言中的语言学与文化意蕴』韩国文化社 pp.305-321

侯精一主编(2002)『现代汉语方言概论』上海教育出版社

黄伯荣等编著(2001)『汉语方言语法调查手册』广东人民出版社

黄晓东(2007)「浙江临海方言音系」『方言』第 1 期 pp.35-51

教育部语言文字信息管理司中国语言资源保护研究中心(2015)『中国语言资源调查手册 汉语方言』商务印书馆

临海市志编纂委员会编(1989)『临海市志』浙江人民出版社

刘丹青(2003)『语序类型学与介词理论』商务印书馆

卢笑予(2013a)「临海方言非谓语前置词的语法多功能性分析」『现代语文』第 5 期

卢笑予(2013b)「浙江临海方言的人称代词」『台州学院学报』第 4 期 pp.34-39,55

卢笑予(2017)「从临海方言“以˩”看 tɕ-类近指词在吴语区的分布与演变」『中国语文』第 1 期 pp.88-99

卢笑予(2018)「浙江临海古城方言的指示词系统」『方言』第 2 期 pp.214-220

钱乃荣(1992)『当代吴语研究』上海教育出版社

杉村博文(1982)「V 得 C、能 VC、能 V 得 C」『汉语学习』6 pp.23-33

石毓智(2011)『语法化理论－基于汉语发展的历史』上海外语教育出版社.

许宝华・宫田一郎主编(1999)『汉语方言大词典』中华书局出版

张燕春(2005)「临海方言单音节声调的实验研究」『南开语言学刊』第 1 期 pp.35-42

张燕春(2006)「临海方言双音节连读变调实验研究」『首都师范大学学报(社会科学版)』第 4 期

pp.73-82
赵元任(1956[1928])『现代吴语的研究』科学出版社
赵元任(1976/2002)「汉语中的歧义现象」吴宗济，赵新那编『赵元任语言学论文集』pp.820-835
（原文：Aspects of Chinese Sociolinguistics ,Essays by Yuan Ren Chao,ed.by Anwar S.Dil,Stanford University Press,1976.袁毓林译，沈家煊校 ）
郑伟(2017)『吴语虚词及其语法化研究』上海教育出版社
中国社会科学院和澳大利亚人文科学院(1988)『中国语言地图集』香港:朗文出版社
周静怡(2013)「临海方言中的古语词例释」『文教资料』第 9 期 pp.22-23
朱德熙(1980)「汉语句法里的歧义现象」『中国语文』1980 年第 2 期
朱德熙(1982)『语法讲义』商务印书馆
（※杉村博文・木村英樹訳(2001)『文法講義　朱德熙教授の中国語文法要説』、白帝社）
朱德熙(1985/1999)『语法答问』商务印书馆 /『朱德熙文集 第一卷』商务印书馆
(日本語)
岩田礼(1994)「現代中国方言学主要参考文献」W.A.グロータース著、岩田礼・橋爪正子訳(1994)『中国の方言地理学のために』好文出版 pp.183-200
太田辰夫(1947/1995)「北京話における“進行”と“持続”」『中国語雑誌』2 巻 2 号・3 号 /『中国語文論集（語学篇・元雑劇篇）』汲古書院
太田辰夫(1956)「『給』について」『神戸外大論叢』7-1・2・3
影山太郎編(2001)『日英対照　動詞の意味と構文』大修館書店
木村英樹(1996)『中国語はじめの一歩』筑摩書房
木村英樹・楊凱栄(2008)「授与と受動の構文ネットワークー中国語授与動詞の文法化に関する方言比較文法試論ー」生越直樹・木村英樹・鷲尾龍一編著『ヴォイスの対照研究ー東アジア諸語からの視点ー』くろしお出版 pp.65-92
木村英樹(2012)『中国語文法の意味とかたち――「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究』白帝社
根岸美聡(2009)「浙江臨海方言における“驮[do^{22}]”の文法化」中国人文学会『饕餮』第 17 号 pp.7-21
根岸美聡(2017)「浙江臨海方言のアスペクト表現形式――実現を表す“□lɜʔ^{0}”、“爻”を中心に――」『開篇』No.35 pp.254-268
橋本萬太郎(1981)『現代博言学』大修館書店
峰岸真琴(2000)「類型論から見た文法理論」『言語研究』117 号 pp.101-127
三原健一(2004)『アスペクト解釈と統語現象』松柏社
米田信子(2009)「ヘレロ語における適用形構文と目的語の対称性」『アジア・アフリカの言語と言語学』4，pp.5-37
李思敬著、慶谷壽信・佐藤進訳(1995)『音韻のはなし――中国音韻学の基本知識』（訂正）光生館
林璋・佐々木勲人・徐萍飛 (2002)『東南方言比較文法研究―寧波語・福州語・厦門語の分析―』好文出版